



日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター

No.3 2001年7月20日発行

■ ようこそ 第27回日本整形外科スポーツ医学会学術集会へ ■

会長 生田 義和



21世紀を迎えるにあたり、新世紀最初の日本整形外科スポーツ医学会を広島で開催できることは大変光栄と存じています。本医学会では、毎年特色あるテーマのもとに約800名のスポーツ整形外科医が全国より集い活発な討論がなされてきました。昨年のシドニー・オリンピックの経験

を通じ、さらに来年のサッカー・ワールドカップを控え、スポーツ医学の果たす役割と社会的重要性は年々増大しているというのが私の実感であります。そこで今回の学会では、整形外科スポーツ医学の基礎から治療最先端までの学術的テーマだけでなく、スポーツ整形外科の社会的位置づけあるいは学生に対するスポーツ医学教育に関する幅広い企画をたてております。

●シンポジウム1「21世紀のスポーツ医学—整形外科の役割と位置づけ—」

座長：青木治人(聖マリアンナ医大)、田中寿一(兵庫医大)

21世紀のスポーツ医学は治療医学だけでなくスポーツ現場との繋がりの重要性が叫ばれています。本シンポジウムでは、プロスポーツ、地域体協、競技団体、スポーツ外来などの現場で活躍されているスポーツ整形外科医に今後の展望について意見を伺います。

●シンポジウム2「ACL損傷のメカニズム—非接触型損傷を中心に—」

座長：福林 徹(東大)、黒坂昌弘(神戸大)

ACL非接触型損傷のメカニズムに関する、靭帯固有知覚、ビデオ・MRIを用いたバイオメカニクスあるいは女性ホルモンと靭帯弛緩性など多方面からの最新の研究発表です。

●パネルディスカッション1「スポーツ医学の基礎」

座長：越智光夫(島根医大)、宗田 大(東京医歯大)

靭帯修復のメカニズム、靭帯再建時のバイオメカニクス、靭帯再建後の関節位置覚、高圧酸素下筋修復、筋損傷の生物学的治療、軟骨再生など現在最も注目されているスポーツ医学の基礎研究を紹介します。

●パネルディスカッション2「上肢のスポーツ傷害」

座長：生田義和(広島大)、高岸憲二(群馬大)

肘内側側副靭帯損傷、離断性骨軟骨炎、手関節関節症と内視鏡、体操における手関節障害、肩SLAP病変などにつ

いて各専門家より発表いただきます。

●「学生のためのスポーツ医学セミナー」

座長：武藤芳照(東大)

全国のスポーツ医学に興味を抱く学生を対象に、スポーツ医学入門からプロスポーツにおける整形外科医の役割などの実践的課題にいたるまで、学生にわかりやすい講義を各エキスパートの先生方をお願いしています。本セミナーは第25回日本整形外科スポーツ医学会(主催：兵庫医大)で初めて行われた「医学生のためのスポーツ医学セミナー」を受け継ぎ拡大したかたちで開催いたします。

●スポーツ整形外科・国際シンポジウム

座長：別府諸兄(聖マリアンナ医大)、Boland AL(ハーバード大学)

アメリカより4名の整形外科医がアメリカ整形外科スポーツ医学会(American Orthopaedic Society for Sports Medicine, AOSSM)トラベリング・フェロー環太平洋ツアーの最終訪問地として来日します。彼らには国際シンポジウム形式で学会発表の機会が与えられます。

●ランチョンセミナー

1)スポーツや運動と腰痛—EBMからの考察—：菊地臣一先生(福島医大整形外科)、2)肩のスポーツ障害：高岸憲二先生(群馬大整形外科)、3)スポーツによる手・肘部傷害の治療—早期と確実な復帰をめざして—：田中寿一先生(兵庫医大整形外科)、4)Meniscal Repair with Implantable “All-Inside” Fasteners：John C. Richmond先生(タフツ大整形外科)

●第3回スポーツ用装具を考える会

シンポジウム「プロスポーツと装具」、パネルディスカッション「足関節にはテーピングと装具のどちらを選ぶ?」

●市民公開座談会

「スポーツ障害を防ぐ—トップアスリートへの道—」

元広島カーブ監督の古葉竹識氏と元広島カーブ選手・現福岡放送野球解説者の高橋慶彦氏による、プロの目からみたスポーツ傷害の対策、練習・指導法について市民公開座談会を開催します。

会場のメルパルク HIROSHIMA・県民文化センターは、広島を中心に所在地に在り、また広島カーブの本拠地である広島市民球場に隣接しており、プロ野球観戦、市内観光に非常に便利です。本学会が有意義なものになりますように、あらゆる努力をいたす所存です。全国から多数の皆様のご来場を心よりお待ちしております。

第28回日本整形外科スポーツ医学会学術集会および 第6回日韓整形外科スポーツ医学会(併催)へのご招待



会長 山本博司

第28回日本整形外科スポーツ医学会および第6回日韓整形外科スポーツ医学会(併催)を平成14年3月28日(木)、29日(金)の両日、高知市にて開催します。平成14年は、ワールドカップサッカーが5

～6月に日本と韓国で開催され、高知では8～10月によさこい高知国体が開催される年でもあります。本学会は、とくにワールドカップサッカーの開催前に行うことで、日本整形外科スポーツ医学会と日韓整形外科スポーツ医学会を意義深いものにするチャンスであります。しかし、この2つの大スポーツイベントがあるために、開催時期を3月末にせざるをえなくなり、卒業式や人事異動の時期と重なり、ご迷惑をおかけして大変申し訳なく思っております。

今回の学会のテーマは、【シンポジウム】I：健康づくりのためのウォーキング科学、II：サッカー選手のコンディショニング(日韓合同討議)―ワールドカップに備えて―、III：スポーツによる腰部障害のメディカルチェックとその対策、【ワークショップ】1：スポーツ事故とその予防対策、2：スポーツ障害と足の痛み、にさせていただきます。

シンポジウムIのウォーキング科学は、スポーツ医が障害や外傷を治療するだけでなく、市民の健康にも関与し、スポーツのカテゴリーを広げていくためにも、中高年のウォーキングに科学的な分析を行い、市民の健康保持に貢献していただきたいと願ったからであります。シンポジウムIIは、日本と韓国で行われるワールドカップサッカーを意図したものであり、日本と韓国のドクターがワールドカップに備えてのコンディショニングについて国際討論を行っていただきます。シンポジウムIIIは、スポーツ障害の中で最も頻度の高い腰部障害を、野球、ウィンタースポーツなどの各種スポーツから腰部障害の要因を分析し、これに対するメディカルチェックを討議していただきたいと願っています。

ワークショップ1：スポーツ事故とその予防対策では、ラグビー、アメリカンフットボール、柔道などのコンタクトスポーツや、スノーボード、スキーなどのスピードスポーツの

事故が多発しており、その実態、治療や対策について学びたいと願っています。ワークショップ2：スポーツ障害と足の痛みでは、これまで深く分析、討議されていなかった足のスポーツ障害について、スポットライトをあてて掘り下げたいと願っています。

教育研修講演では、1)越智光夫教授には、組織工学技術に基づく関節軟骨修復術についてお話をさせていただき、軟骨障害の治療の先端的研究にふれるとともに今後の展開の方向について学ぶことができると思います。2)越智隆弘教授には、野球少年を障害からまもる社会的動きについてお話をさせていただき、野球少年の健全な育成について学び、全国的な展開が進んでいくことを願っています。3)宮永豊教授には、サッカー選手を中心としたスポーツ選手のメディカルチェックのポイントについてお話しさせていただき、ワールドカップを控えて、サッカー熱が市民の間にさらに高まると思われませんが、それに対する備えにさせていただきたいと願っています。4)太田美穂先生(東京大学大学院教育学研究科)には、「高齢者の転倒・骨折の予防医学―生活習慣病への整形外科医の関わり―」についてお話しさせていただき、高齢者の運動管理について学びたいと願っています。

骨と関節の10年のキャンペーンの1つとして市民フォーラムでは、「国体と地域スポーツの振興」とし、地方において国体に人的、経済的なエネルギーを傾注していますが、これらを国体後にいかに市民のスポーツ振興に役立てるかが大切です。学会に参加した専門医、国体の主催者である県、これまでのスポーツプレーヤーにアドバイスをいただき、市民とともに考えたいと願っています。現在のところ、オリンピック金メダリストの鈴木大地講師に参加していただく予定であります。

3月は皆様にとってご多忙な時期であろうとは存じますが、この時期に開催せざるをえなかった理由をご賢察賜り、是非ともご参加いただきまして、ご発表やご討論を賜り、整形外科スポーツ医学の発展にご貢献いただければ幸いです。3月下旬の高知は、桜が満開でございます。会場近くの桜に彩られた高知城や、陽光に溢れる土佐の海や清流もお楽しみいただければと願っております。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

各種委員会報告

編集委員会

編集委員長 高倉 義典

本年度(2001年)の編集委員は4名が交代して、青木治人(聖マ医大)、柏口新二(徳島大)、木村雅史(群馬スポーツ医学)、下條仁士(筑波大)、高岸憲二(群馬大)、高倉義典(奈良医大)、竹田毅(慶應大)、戸松泰介(女子医大)、仁賀定雄(川口工業病院)、浜田良機(山梨医大)、増島篤(東芝病院)、安田和則(北大)の12名で構成されています(担当理事:越智隆弘)。委員会の任務は日本整形外科スポーツ医学会雑誌の発刊で、年4巻を発行しています。他の医学会誌と同様に最近では投稿原稿が多少減少傾向にあります。4巻のうち学会抄録号が1巻、和文論文号が2巻、英文号が1巻の割で、和文が25から30編、英文が10編前後の投稿があります。現在の1巻あたりの発行部数は2,000部です。

それらの投稿論文の査読を行うのも編集委員の責務であり、それぞれの論文を主査と副査に分かれて2名ずつで査読しています。論文の内容によって、委員の中に専門家がない場合には評議員の先生方に依頼して協力をお願いしています。

近年の大学医学部および医科大学の大学院大学化に伴い、教員の資格審査が行われています。その際の基準になるのが人格とか臨床力ではなく、著書、原著および総説といったその人が書いた論文になります。そのなかでも impact factor のある英文雑誌に重きが置かれる傾向にあります。したがって対象になる研究者はまずそれらの雑誌への投稿を試みるために、和文の雑誌への投稿は二の次になり、その数も全般的に減少傾向にあります。当整形外科スポーツ医学会雑誌においても、和文号および英文号とも現状程度の投稿数を維持するために、学会で発表された論文は是非投稿していただきたく、また指導されている先生方におかれましてはご協力お願いいたします。

広報委員会

担当理事 中嶋 寛之

第1回広報委員会が平成13年6月23日開催された。

出席の須川勲・田中寿一・入江一憲・三木英之・酒井宏哉委員の互選により田中委員長が選出された(菅原誠委員は欠席)。事業内容を大きく、1)ニュースレター、2)ホームページ、3)患者・関係者説明用パンフレットの3つに分け、それぞれ担当を決めた。

1)ニュースレター:これまで年1回発行していたが、年2号発刊することとし、1号は学術集会関連速報号、もう1号は国際学会見聞記・Fellow報告記・各委員会活動報告なども含んだ読み物風のものとして会員向けの広報紙として位置付けることとした(担当は須川勲・菅原誠委員)。

2)ホームページ:現状では、トップページ・役員名簿・学術集会の案内と演題募集程度であるが、さらに学会概要・理事長挨拶・学会組織・入会案内などを加え充実させたい。今後の内容の充実に関しては会員からの要望も受け付け対外的な広報活動に活用することを計画している(担当は入江一憲・酒井宏哉委員)。

3)患者・関係者説明用パンフレット:理事会からの要望で新たに企画するものである。すでに日本手の外科学会で作成されているものを参考にして、足関節靭帯損傷・Osgood病などの身近なスポーツ損傷を中心に上げていく予定である(担当は田中寿一委員長・三木英之委員)。

委員会としては、とりあえずの事業として7月中にニュースレターの発行を目指していく。

国際委員会

担当理事 田島 直也

国際委員会の委員は、今年大幅に入れ替わり以下の先生に就任して頂いたが担当理事は生田義和教授と私が今年度も引き続き務めさせていただくことになった。

新委員(敬称略):黒坂昌弘(神戸大)、斉藤知行(横浜市大)、阪本桂造(昭和大)、成田寛志(札幌医大)、福林 徹(東大大学院総合文化研究科)、別府諸兄(聖マ医大)

新委員会は近日中に開催予定であり、現在のところ新委員長は決まっていない。今年の活動方針、事業などは新委員会で審議されることになるが今回は従来この委員会がかかわってきた国際交流 Traveling Fellow について述べる。

1. AOSSM Traveling Fellow について

日本整形外科スポーツ医学会(JOSSM)はアジア諸国とともにアメリカ整形外科スポーツ医学会(AOSSM)との間に Traveling Fellow の交流を行っており、今年は Arthur L Boland (MGH) ら4人が9月12日から23日まで広島、神戸、東京、札幌を訪れる予定である。

2. JOSSM/GOTS/KOSSM Traveling Fellow について

日本、韓国整形外科スポーツ医学会はドイツ、オーストリア、スイスの整形外科スポーツ医学会と毎年交互に交流を行っている。今年はヨーロッパを訪問する年であり、望月由先生、高尾昌人先生が韓国の医師2人と6月5日から7月1日までドイツなどを訪問し7月2日帰国の予定である。この制度も10年になり、すっかり定着しているといえる。

3. 第6回日韓整形外科スポーツ医学会

第6回日韓整形外科スポーツ医学会は山本博司会長のもとで、来年3月27日から29日まで第28回日本整形外科スポーツ医学会学術集会と併催で行われる予定である。

以上は従来から行われている国際交流の今年度の予定であるが、今後さらに質的にも活発な国際化の行われることが期待される。

教育研修委員会

担当理事 武藤 芳照

学会活動の1つとして「教育研修」を考える場合、学会員を対象とした教育研修の場、内容、方法が主体となっている例が多い。そのこと自体の重要性は誰も認めるところである。一方、今年度発足した当教育研修委員会を担当する理事(委員長)としては、まさしく「教育」に重点を置き、学会の発展のために、次の世代の人材を養成するとともに、広く社会一般への教育・啓発にかかわる種々の活動を推進できるような力を注ぎたいと考えている。

第1は、医学生・研修医への教育。整形外科学が、身体の活動および運動器を根幹とした学問領域であり、スポーツ医学(Sports Medicine)はヒトの運動および運動器の大切さを認識したうえで、身体特性に即した適切な質・量の運動・スポーツと健康との関係を考求する研究分野かつ実践領域であることを伝える。

第2は、高校生および高校運動部活指導者への教育。運動・スポーツの主目的実践者であるとともに、将来医師となる道を選択する可能性もある多くの生徒を含んでいる。野球肘、疲労骨折などをはじめとする高校生のスポーツ外傷・障害の予防は、きわめて重要な本学会の社会的使命である。そこで、高校生自身および運動部指導者に、身体を理解を図り、スポーツ外傷・障害の予防に役立つ基本的知識、技術を直接指導する機会を設けることは、有効な方策であろう。たとえば、全国高校体育連盟などと連携・協力して、各ブロック単位で条件の整ったところから、順次教育研修の事業を実施していくような企画はどうであろうか。

第3に、一般社会への教育。新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、インターネットなどのマスメディアを活用して、本学会として継続的に社会への教育を行うとともに、学会開催と関連して、市民公開講座などの機会をさらに拡充して、全国での教育・啓発事業を推進することが必要であろう。

教育とは、希望を語ることであり、学会の一層の発展と、整形外科学、スポーツ医学が集積してきた重要な知見を基礎に、運動・スポーツを手だてとしてより一層健康な社会を構築できるように地道な努力を続けることが、本委員会の責務と理解している。

学会員の皆様のご協力とご指導をお願い申し上げます。

委員(敬称略)：大久保衛(ダイナミックスポーツ医学研)、岡崎壮之(川崎製鉄千葉病院)、栗山節郎(日本鋼管病院)、左海伸夫(角谷整形外科病院)、宮永 豊(筑波大)、横江清司(スポーツ医・科研)

社会保険問題委員会

担当理事 圓尾 宗司

社会保険問題委員会は、本年度新設された委員会で、日常の診療活動や、スポーツの現場に直接かかわってくる問題を抱えてまいります。皆様のご協力をお願い申し上げます。

スポーツ医学をとりまく世界では、既に多くの方が現実として直面しておられることと存じますが、とくにアマチュアスポーツの現場では、メディカルチェックは医師のボランティア活動によって行われているのが現状で、それさえもはや限界に達しようとしております。できるだけ早期に社会保険制度に取り込まれるべき項目の1つと考えます。

また、運動処方料は一部生活習慣病において、保険適用となっておりますが、われわれが日常扱う疾患の中にもその適用は多いのではないのでしょうか。

一方、スポーツの現場ほど、非医師による医療類似行為が行われているところはないといっても過言ではありません。本委員会でも調査・研究のうえ、対策を考えてまいりたいと思っております。

まずは、整形外科スポーツ医学をとりまく現状を把握すべく調査を進めるほか、外保連への加盟を目指し活動してまいりたいと存じます。どうか、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

担当理事：圓尾宗司、委員長：龍順之助

委員：今井立史、今給黎篤弘、田島 寶、乗松敏晴、藤澤幸三

学術検討委員会

担当理事 守屋 秀繁

2001年度委員(敬称略)：岩本英明(福岡大)、越智光夫(鳥根医大)、菊地臣一(福島医大)、桜庭景植(順天堂大)、史野根生(大阪府立看護大医療技術短大)、富士川恭輔(防衛医大)

編集後記

21世紀を迎え本学会も四半世紀を過ぎ、2つの委員会を新設して充実を計ります。社会保険問題委員会で医療としてのスポーツ医学を、教育研修委員会で医学生をはじめ社会一般の教育・啓発に取り組みます。その他の委員会も抱負を語っています。一読してご意見をお寄せください。

来年は、日韓整形外科スポーツ医学会・合同会議開催の年でワールドカップと重なるため第28回(高知市)は3月開催となり、第27回(広島市、本年9月)とその間6ヵ月と変則になりますが、準備のほうよろしく申し上げます。

「学生のためのスポーツ医学セミナー」を同時開催します。参加費1,000円(第27回学術集会を無料聴講、懇親会無料)です。お誘いください。(広報委員会 須川 勲)